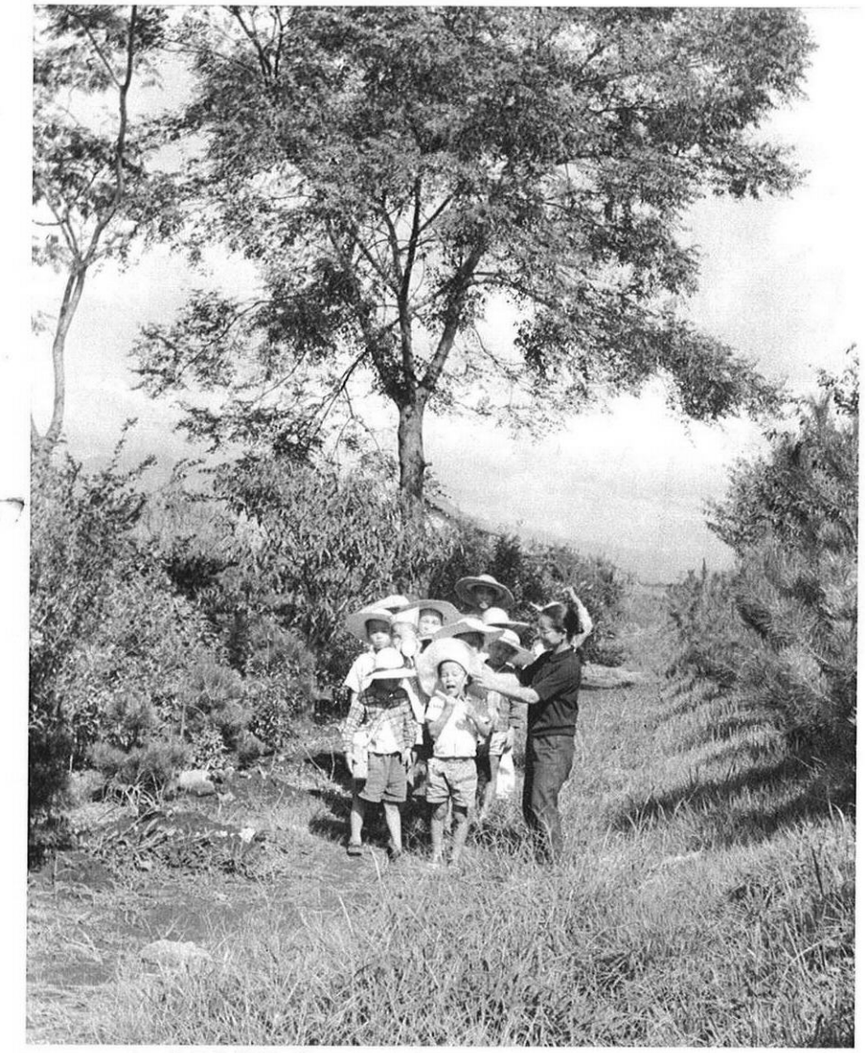
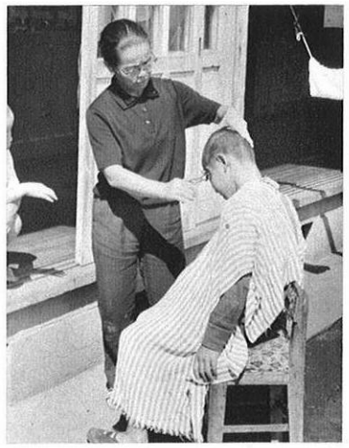
園児と保母のいる風景

— 県立肥後学園にて —

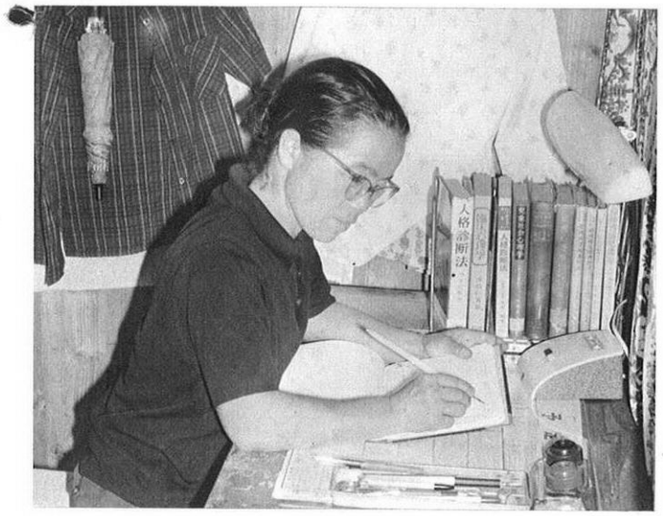
素朴で純心なこの子たちに一日も早くしあわせを……園児を見まもる保母の願いは尊く美しい。それなりに集団生活の中での保母の役割はきびしい。何故なら……それは保母の役目が単に母親がわりというだけのものでなく、社会的な配慮と、そして親子関係の育成といった要素が絶対に必要だからである。



上・今日は学園の裏手のくぬぎ林へ…アッあそこに栗の実がある！



上・も少しの我慢ヨ…



上・ほっとひと息。虫の音をききながら日誌に向う。

上・衣服や寝具の補修もひと仕事だ。

〈第一線の人びと〉

保母

■県立肥後学園のYさんの場合

♣二羽のカラス

訪問した朝、二羽のカラスが園児たちの間を飛び廻っていた。二カ月ほど前、園児たちが学園の裏山からヒナを拾ってきて育てたのである。そして、この二羽のカラスに「太郎」と「カア子」と名ずけたという。「太郎」や「カア子」とのふれあいが、ともすれば閉ざされそうな、この子たちの感情を呼びさます一つのきっかけになれば——Yさんは心の中でそう願うのである。

熊本県には、知能のおくれた、いわゆる「精神薄弱の子供を入所させて、保護するとともに、独立自活に必要な知識技能を与える」ための精神薄弱児施設が四カ所ある。菊池郡西合志村にある、県立肥後学園もその一つである。

全寮制で、小学一年生から満一八才の子供まで、定員いっぱいの百人が、五つの寮に分かれて共同生活をしている。

ところでYさんが担当している寮には、一七人の子供たちがいて、I指導員ともども、子供たちと寝食を共にしている。つまり寮や施設は、それ自体が家庭であり、そこには当然、父の役目である児童指導員と、母の役目をする保母が、必要になってくるわけである。

♣三十四の瞳

学園の一日は、朝六時半の起床から始まる。Yさんの日課の中で、いちばん忙しいひとときだ。Yさんは未亡人で、中学三年生を頭に三人の子供がいる。しかし、Yさんは「五体健全なわが子をみるにつけ、施設の子供たちがふびんで、ともすれば、わが子の面倒をみるのは後まわしになる。」という。

Yさんが苦労するのは、知能の程度の差がはげしい十七人の子供を、どういうふうにバランスのとれた世話をしていくかということである。顔を洗うといった、日常生活もできない子もいる。普通の子とあまり違いのない知能をもった子もいる。だからといって、おくれのひどい子にばかり、かまうことはできない。たちまちにして、ほかの子供たちの嫉妬を買うことになるのである。こういった、孤立性が強く、個人差のはげしい子供たちを、グループに同化させ、生活に興味と意欲をもたせるためにも動物飼育や、遊戯、貼り紙遊び、遠足などの余暇指導が、保母の重要な仕事のひとつになるのである。

その上に、寮の内外の清掃、洗濯、衣服の修理、食事、入浴、それに数多くでる病人の世話。時折、面会に訪れる保護者との面接など、Yさんは夜八時半の消灯まで、てんてこまいをしなければならない。それでも、これでYさんの日課が終ったわけではない。子供が寝しずまった後で、実はいちばんの保母泣かせが待っている。子供の夜尿の世話である。

♣喜びと悲しみの谷間で

こういった苦労も、その積み重ねが、少しづつでも子供の人間形成につながっていくだけに、Yさんの心の楽しみも多いという。

そうはいっても、折にふれYさんは自分の心を暗くし、悲しませる〃壁〃を意識しないわけにはいかない。それは、子供たちに対する世間や一部の親の無理解である。軽度で親のいる子供は、盆や正月には食糧携行で、親元へ帰省しているが、なかには一日もたたない内に帰ってくる子がいる。食糧だけ親にとり上げられ、子供は冷たく放り出されるといった、あってはならない悲劇が、これまでにもあったという。

「知恵おくれでもよい。」といって子供を雇ってくれた人の中からも、「あんなとは思わなかった。」と思わぬ苦情が舞いこんでくる時はガックリくる。こうして学園へ帰ってきた子は、再び、社会から取りのこされた子になってゆき、初めから、やりなおしということになるのである。だから、こういった社会との間に悲しい断層をつくらないためにも、家庭との連絡や就職先の訪問は、指導員や保母の欠かせない仕事になってくるのである。

だが、決して暗いことばかりでもない。この学園を出て、立派に就職した子は六〇人を越えている。ことしのお盆には、大阪の理髪店に就職していった子が帰省した折、バリカン片手に遊びにきて、一日がかりで、園児の散髪を奉仕してくれた。

また、学園をでて松橋町の瓦屋に就職しているT君が、この秋めでたく結婚にゴールインすることができた。

Yさんは、それらのことを、わがことのように目をほそめて嬉しそうに語るのである。

ともあれ、保母の仕事は地道で、息の長い仕事ではある。しかし、それだけに、子供たちが立派に成長して、社会に巣立つのを見送る喜びは、施設の保母だけが味わうことのできる特権なのである。

（注）ここでは精神薄弱児施設の保母を紹介したわけだが、この他にも保母は乳児院、保育所、養護施設、盲ろうあ児施設、し体不自由児施設など、十二種の児童福祉施設で、それぞれ活躍している。